ユニバーサルデザイン研究部会

健康で安全な施設・運営のためのWELLヘルスセーフティ評価

部会長 似内 志朗
にたない しろう
ファシリティデザインラボ 代表
認定ファシリティマネジャー

コロナ禍でワークプレイスに対する人々の意識は変わった。これまで長い時間を掛け交通機関を乗り継いでオフィスまで行くのが当たり前だった社会。時には遠くの街での数時間の打ち合わせのために、飛行機や新幹線に乗り出張する。そうした「当たり前のこと」が苦痛だったり、時には楽しみであったりした働き方が変わった。健常者にとっても多くの時間と労力をかけてきた「移動」は、とりわけ移動に関してハンディキャップを持つワーカーにとっては、働く上での大きなバリアになっていた。よくいわれることだが、移動制約者にとってコロナ禍によるリモートワークの普及は大きな福音でもある。働く「当たり前」の範囲がぐっと広がった。

コロナ禍後のワークプレイスを語る時に、将来の姿としてよくいわれるのが、在宅勤務やワーケーションを含む「広義のABW(Activity based working)」である。働きやすいときに働きやすい場所・環境で働く。これまでユニバーサルデザインの課題であった建物のバリアフリーやオフィス内でのレイアウト、情報機器の選定などについて解決策が模索されてきたのだが、ことユーザーが特定できるワークプレイスのユニバーサルデザインについていえば、リモートワークと広義のABWは「ワーカーが自分の最も働きやすい環境(労務環境・生活環境)を自分で設定できる」ことが可能となることで、ほぼ解決できるように見える。実際80%の課題は解消するだろうが、そうはいっても人々がリアルに集まることによって、感情的共有を含むモチベーションやエンゲージメントに関わる部分は必ず残る。つまり「リアルな場」の必要性は残る。「リモートとリアルのベストミックス」の形が模索されると思う(その割合はさまざまであろうが)。では、そうしたリアルなワークプレイスはどのようなものであろうか。

さまざまな考え方があると思うが、私は「コンパクトであるが、安全で健康で快適で、ワーカーが集まりたくなるような場所」であろうと思う。そこでの、感情的な共有とイノベーティブな会話の成果をもって、それぞれのワーカーが再び自分の働きやすい環境(ABW)に戻って仕事をする。こうした場面での、リアルプレイスの「安全で快適」な環境について、最近、わが国でも関心が高まってきたWELL認証を統括するIWBI(The International WELL Building Institute)が、とりわけコロナ禍後の建物使用を踏まえた格付評価であるWELL health-safety Rating(WELLヘルスセーフティ評価)を昨年6月に開始した。いわば「健康と安全性に配慮した運営をされているファシリティ」の目安となるこのレイティングは世界中で関心を集め、多くのファシリティが登録・評価を受けている。とりわけ、コロナ禍の影響を受けやすい障害を持つ方々や高齢の方々を含むにとっても、この時期に「健康と安全性」への配慮のひとつとして役立つに違いないと思う。◀